



図2—31 中黒田遺跡遺構配置図

住居跡が見つかっている。二軒とも、床の中央部が下がる。一号住居は直径二・二メートルの円形、二号住居は直径二・八メートルの隅丸方形で、ともに柱穴は見つかっていない。二号住居からは腰岳産黒曜石の石鏃、サヌカイト・水晶の剥片（写真2—3）と姫島産黒曜石の剥片が出土している。また、少し離れた調査区西側で柱穴が巡る土器埋設炉が見つかっている。柱は炉がやや南東に偏するように直径約六メートルで六本並んでいる。炉に使用した土器（図2—30・5）は上部を失っているが、鉢形で器壁は一センチ前後と厚く、胴部の最大径は約三〇センチとなる。胴部の外面にはアナダラ条痕で「エ」字状の文様が施されている。埋設炉の周辺は広く赤変していた。検出した住居の配置と削平状況から見て本来は調査区全面に住居が存在していた可能性が高い。

二 京都平野の縄文時代

京都平野周辺での草創期は、築城町本庄大坪遺跡から柏原式土器が出土しているのみであり、様相が不明である。前期になると遺跡数が増え、行橋市竹並遺跡、辻垣遺跡で早水台式、福丸遺跡、苅田町山口遺跡、町内の黒田二又遺跡で田村式押型文土器が出土している。周辺地域でも、先の本庄大坪遺跡のほか、豊津町徳永川ノ上遺跡、犀川町自在丸遺跡、寺門遺跡等から押型文土器が出土している。この時期までは安定化した集落を営む段階には至っておらず、遺物が点在するのみである。



図2—32 京都平野の縄文遺跡

前期から中期にかけても資料数は少ない。前期では京都平野の南方で築城町上別府沖代遺跡、松丸D遺跡、椎田町西八田平原遺跡、小原岩陰遺跡で轟B式土器が出土している。上流域では犀川町横瀬楠遺跡、自在丸遺跡、下伊良原平原遺跡などでは、轟B式土器がみられる。椎田町小原岩陰遺跡では、轟式に伴い人骨片が出土している。中期では、行橋市小豆田遺跡、荇田町北谷遺跡が遺物の散布地とされているが、詳細は不明である。椎田町の東高塚^{ひがしたつかこうほうだ}弘法田遺跡では船元式土器が出土している。

京都平野の海進は貝化石群の分布と珪藻分析によって四八〇〇年前ごろに現在より一・八メートル高く、その後も内湾化していたとされる。これによると、縄文時代中期ごろの海岸線は行橋市上津熊から今井あたりまで入り込んでいたことになる。遺跡の分布はこうした環境を反映しているのかもしれない。

後期になると、遺跡数が増えるとともに住居跡が確認されるようになる。町内でも黒田種生遺跡で二軒の住居跡が発見されている。豊津町節丸西遺跡では後期を中心とした二四軒の住居跡が確認されており、京都郡最大の集落遺跡である。石囲炉・土器埋設炉・複数種の炉をもつ住居が認められたという。

また、行橋市長者原遺跡でも一軒住居跡が確認されている。この住居は中央に地床炉をもち、後期末ごろの土器片少量と打製石斧が出土している。

椎田町山崎遺跡では鐘崎式器の石囲炉をもつ住居跡、土器埋設の複式炉をもつ北久根山式の住居跡が確認されている。

豊前地域では、後期の住居跡のなかに方形ないしは隅丸方形プランで石囲炉をもつ特徴的なものがみられる。後期の初めころに現れたこのタイプの住居は豊後と遠賀川下流域を除く他地域では類例が見当たらず、後に他の地域に影響を与えたと考えられている。中ごろにはこの地域の住居は円形や楕円形のプランに変わり、複式炉や土器囲い炉のものへ変わっていく。

晩期には平野部での遺跡は遺物のみの出土が多い。行橋市では、柳井田早崎遺跡や辻垣畠田・オサマル遺跡などが晩期土器の出土で知られる。犀川町でも大熊条里遺跡や犀川盆地で晩期の土器が出土している。

そうした中で築城町の十双遺跡・松丸D遺跡ではともに貴重な住居跡が確認されている。住居跡は十双遺跡では楕円形に近く、松丸Dでは円形プランの直径五メートル程度である。松丸D遺跡では中央の炉を挟むように二本の柱穴が確認されている。

その他にも福岡県遺跡分布図には行橋市天生田の上豆田遺跡、荇田町若久町の中州遺跡、同じく上片島の狹師ヶ谷遺跡、浄土院遺跡などの遺跡が見える。また、定村貢二の調査によれば行橋市の宝山貝塚・長井墳墓遺跡・鳥井原遺跡・中尾石器散布地・大首石器散布地等が記されているが、詳細は分かっていない。このうち浄土院遺跡については、原口信行が鐘ヶ崎・西

平土器とともに敷石面を確認したと記している。

三 北部九州の縄文時代

一般に縄文時代の遺跡は東日本で密度が高く、西日本では低いとされる。その原因として東日本にはサケ・マスの遡上する河川が多く、安定した食糧獲得ができることから定住に適していた可能性が指摘されている。同時期の集落の間隔も東日本では五〇〇メートル〜一キロであるのに対し、西日本では五〜一〇メートルと離れているという研究もある。環境の影響が大きい狩猟採集社会では、集落単位の生活圏が食糧獲得のため必要な範囲であったであろう。したがって、集落間の距離が人々の活動範囲を示しているとみられる。

こうした地域差は土器型式の分布範囲にも反映され、早期の押型文土器のように西日本一帯に分布するものを除き、隣接地域の影響を受けながらも九州では独特の土器が作られている。同様な現象は九州内部においてもみられる。九州中央の山地を境に、西北九州・東九州・南九州で土器に変化が生じていることは古くから指摘されている。また、主要な貝塚の分布は熊本県の有明海沿岸部に集中しており、魚介類が主な食料源であったことを示している。

九州においては、草創期に未だ細石刃文化を残していることにも現れるように縄文時代が始まった時点からすでにほかの地

域とは異なった発展を始めている。また、土器を正位に据えて施文する東日本に対し、九州では上下逆に文様を施す点も対照的とされる。早期には、関東地方を中心とした撚糸文土器が東日本に広がり、近畿地方を中心とした押型文土器が西日本に広がっていく。

前期の曾畑式土器は、朝鮮半島の影響を受けた西北九州の土器と轟B式系の土器が半島の櫛目文土器の影響によって文様帯の分割や全面への施文等を受け入れて西北九州で成立したとされる。草創期に東日本で始まり中部地方以北で盛んに行われた縄による施文、いわゆる縄文はこの時期に西に徐々に広がっていくが、九州の曾畑式のみには普及しなかった。同じく前期には西北九州に特徴的な扁平磨製石斧が現れる。この片刃の磨製石斧は刃を削り出す側の胴部を長軸方向にわずかに凹ませることを特徴とし、「西北九州型片刃石斧」とも呼ばれる。この石斧はもともと古い例で轟B式土器に伴って出土しているが、その段階では国内で類例が見つかっておらずやはり西北九州が最古



長崎県深堀 (1/4)

図2-33 西北九州型
磨製石斧

の例となる。その後、曾畑式土器が広がっていく状況に対応するよう九州内のみを展開していく。

また、中期に九州一円に広がる阿高式土器は、曾畑式土器と同じく胎土に滑石の粉末を混入して独